

「中国の歴史と文化をみつめて」

大谷 敏夫

は し が き

私の生れた一九三二（昭和七）年は、日本が満州事変から満州国建設へと中国への侵略を開始する時期であった。日本は以後一九三七年日中戦争を起し、更に一九四一年太平洋戦争へと戦火は拡大し、一九四五年敗戦を迎えるまで私の少年期は戦争と共にあったといっても過言ではない。中学二年の夏に戦争は終わったが、それまでの軍国主義から民主主義国家へと大きく転換することになり、そのことが少年期の私にとって人間形成の面でも大きな影響を与えたものと思われる。

ところでアジアに対して日本をリーダーとする大東亜共栄圏の建設を素直に信じていた私にとってそれがアジア侵略のためだったと言われてもにわかになんかそれを受けい

れる心境にはならなかった。とはいえ日本が中国を侵略したのが事実であるとしたならば、そのことを自分の目でしっかりと確かめてみたいという気持ちになり、ここから中国の歴史を研究しようと思うようになった。一九五〇（昭和二五）年、大学入学後東洋史学を専攻したのは以上の理由からである。

戦後の中国史研究の状況

戦後の中国史研究は戦前の反省から近代における日本の中国侵略の歴史を辿ることが主流となっていた。それと共に一九四九年に中華人民共和国が成立したことを中国革命の勝利として把握し、中国近代史を革命史とみる研究が重視されていた。こんな中にあっても中国史研究を明治以降の歴史学研究の一つの成果でもあった実証的且つ客観的な方法論に基づいて事実の検証を重視する立場を取り続けていた宮崎市定先生のような学者もいた。

宮崎氏が一九五〇年出版された『東洋的近世』^{（1）}という著作は、ヨーロッパ、イスラム、中国の近世を比較して論じたものであったが、以上の方法論に立ちながらも世界史の観点を加味して歴史事象を考察するという広い視

野を提供したものであった。私の大学の恩師荒木敏一先生は宮崎史学を学んだこともあり、大学の講義では専ら宮崎研究を紹介された。そんなこともあって私は自然に所謂京都学派と称される歴史学の研究方法を身につけていたと思われる。但し私自身中国近代の歩みを的確に把握したいという欲求からまずその原点ともいえる阿片戦争の研究に関心があった。

その頃中国近代史研究に新たな視点を提示されたものとして小野川秀美先生の清末政治思想研究に関する一連の論稿が公表されていた。⁽²⁾ 小野川氏は阿片戦争に始まる中国近代史の展開を洋務・変法・革命の三段階に区分し、それを綿密な実証に基づき論述されたものであった。これは当時中国の研究が阿片戦争以降を反帝国主義、反封建主義の運動として把握する革命史の展開とみていたのに比較して主義よりも実証に重きを置く点において私には小野川研究がより説得力のあるものと思えた。

この小野川研究と並行して戦後出版された島田虔次先生の『近代思维の挫折』⁽³⁾は、明末清初思想状況の中で陽明学者李卓吾の思想の中に近代的な市民意識の覚醒をみたものであるが、これは中国をアジア的専制君主国家としてとらえ、民には自由がない社会が長年に亘って停

滞してきたとみる中国観に打撃を与えるものであった。但しこのような島田氏の研究の背景には、所謂明末清初に資本主義的生産の萌芽をみよとした中国・日本の学界的状況もあったと思われる。また当時世界史の観点にたって欧米とアジア（特に日本）の資本主義経済発展の過程を比較し、アジアの後進性を立証した上でアジアの進路を提言していた大塚史学の研究もあり、近代市民社会の成立をめぐる研究も深化していた。島田氏はこのような研究状況下において明末清初の思想の中に「近代」意識をみようとされたのであるが、この著の改訂版を出された後の版ではその命名について検討の余地があったとのべている。ところで島田氏は本著の序文の中で、内藤湖南の宋代近世説の根拠となっていた平民の発展と政治の重要性減衰に注目しそれが思想學術の分野において自由研究の形で現われるとのべているが、これは恐らく島田氏の心の中に宋代を近世ととらえ、それに続く明末清初に「近代」という時期を設定するという考えがあったのではないかと推察される。しかし明末清初を「近代」とするには、戦後学界が阿片戦争以降を近代と設定している研究状況からみても無理があると思われる、ここから改訂版においてその点を説明されたのであろう。し

かしいずれにしても明末清初という時期は、學術思想面において新しい意識が生み出されていたことは十分納得できるものである。

ところで阿片戦争時期の維新思想を研究しようとしていた私にとって、この時期を代表する魏源・龔自珍等の思想家が公羊学に依拠して政治改革をといっていることを知り、公羊学研究の必要性を痛感した。公羊学は經書の一つ「春秋」の解釈学であるが「微言大義」をといて孔子が「春秋」を著述した意向に政治改革の理想をみたのである。更に公羊学を解釈した後漢の何休の「三科九旨説」を研究した常州の学者劉逢禄に学んだ魏源は、この説にある坳乱、昇平、太平に向って世の中が変化していく中で政治のあり方をといている点に共鳴し、ここから現実の政治改革の理論的根拠にしようとしたのである。ところで公羊学者は政治改革という用語を「經世済民」と称していたが、その意味は文字通り世を經め民を済むということであり、この言葉は古代から使用されていた。「經世」の語源については、莊子が「齊物論篇」の中で「春秋は世を經めし先王の志にして、聖人議して辯かにせず」とのべたことにあり、ここから「春秋」を經世の書としたことに由来している。この「春秋」について

は当時伝えられていた古い歴史書の名であって必ずしも孔子の編纂した「春秋」とみなくてもよいが、少くとも昔の王者の記録であった点は留意しなければならない。

この「經世」という用語が政治改革の理想を示す意味で盛んに使用されるようになったのは明末清初であった。

この時期を代表する顧炎武、王夫之、黄宗羲という三大学者はいずれも經世の意義を提唱していたのである。明朝が李自成によって滅ぼされ、其後滿州族の清朝が入関して中華王朝を繼承するという時代の変革期に生存していたこれら三大学者にとって王朝国家のあり方を追求することこそ緊急の課題であった。この時代宋代に成立して体制教学となっていた朱子学が形骸化し、明代に勃興した陽明学も極端化していく中で、朱子学、陽明学の本来の思想を復元化すると共に、それを理論的根拠として經世をといいたのがこれら三大学者であった。但時代の変革期にあつて当時の市民意識に最も適合していた思想家が陽明学左派と称された李卓吾であった。ここにこれら三大思想家と李卓吾との關係をどのように把握するかが思想史の課題となっていた。この關係を思想上相對立するものとしてみることは簡単ではあるが、同時代の思想として共通性もあるのではないかという命題について挑

戦しそれについて見事に一つの仮説を提示されたのが溝口雄三氏であった。⁽⁴⁾氏は島田氏同様李卓吾の研究から明末清初の思想にとりこんでいたのであるが、そこから王夫之・顧炎武といった朱子学を尊重する思想家のつく天理に依拠しながらも人欲を肯定する面があるという指摘に注目され、それは人欲肯定を極端にまでおし進めていた李卓吾の思想と共通するものであるといわれたのである。更にこの人欲肯定の思想は清中期の戴震の思想にみえる社会的欲望へと連っており、更にそれは清末の改革や革命思想にも及んでいるという大胆な設定も行った。

ここでは島田氏が明末清初にめばえた市民意識——これは溝口氏のいう人欲の肯定という意識にも重ねてみることができ——が清朝の支配確立の中で挫折し、それが再び提唱されるのは清末になってからだという設定と相違していた。⁽⁵⁾溝口氏は清代思想を連続したものとして把握し、思想の動態的展開の必要性を提唱したのである。

ところで溝口研究は儒学思想史の展開に重点を置いていたが、私は清代政治思想の展開を軸としてこれまで考察してきたことをまとめてみようと思うようになった。その場合キーワードとなるのは経世思想ということにな

ろう。明末清初顧炎武・王夫之・黄宗羲が研究した経世思想が其後清代を通じて継承され、清末の魏源・龔自珍に至るまでの思想的展開を叙述することを課題とし、その研究成果を一九八九年一月学位論文として提出したのである。

一九九〇年代の研究

私は先著の研究で清代政治思想を通史として叙述することに成功したものの私の研究の原点でもあった阿片戦争以降の中国近代と称される時期についての見解が十分であったので次の課題としてこれに取り組むことにした。その際当時溝口雄三氏によって『方法としての中国』⁽⁷⁾が出版され、近代中国像の再検討が提示されていたことに注目した。溝口氏は戦後の中国近代史研究を批判し、それは小野川氏の清末政治思想研究の特色をなす洋務、変法、革命に至る三段階説にも及んでいた。

この中でも洋務運動のとらえ方について戦後の研究がその理論としての「中体西用論」も含めて結局は本質的には反動的且つ売国的なものとしていたことに対し実例を提示しつつ反論された。この論文は当時中国近代史研

究者にかなり衝撃的な影響を与えたものと思われる。溝口氏の見解と同様に私も洋務運動をすべて反動的且つ売国的とする点については異論があり、その開明性や開放性は評価すべきであると考えていた。その上になつて私は阿片戦争期の陶澍・林則徐に代表される経世官僚の思想・政策は、次の洋務運動期の曾国藩・李鴻章といった経世官僚に系譜的にも連続している点を指摘した。^⑧

次にこれら経世官僚は内政改革にも尽力しており、外交面に貢献しただけでないことも明らかにした。従つて当時論者が曾国藩・李鴻章を洋務官僚と表現しているのでは不適切であると考えた。更に「中体西用論」について私は溝口氏同様従来の王朝支配体制の再強化を図つた思想として反動的な封建道徳とする見方には賛同できなかった。特に張之洞の「勸学篇」にみえて思想は、伝統的な儒教倫理を中体としつつも西用に関しては近代技術や産業の導入のみに限定するのでなく政治・経済・教育等の行政にも及んでおり、中国の内政・外交に亘る改革をめざした内容となつている点を指摘した。^⑨

ここから私は清末の経世思想を分析し、そこに魏源・龔自珍等の公羊学に依拠した経世学と曾国藩等の朱子学に依拠した経世学の二大潮流があることに注目した。こ

の両派は経世学という面で共通しており、相互に関連しながら継承され、清末には公羊学を拡大解釈した康有為の経世学と朱子学を伝統教学として重視した張之洞の経世学とに継承され、この両派の決定的対立は戊戌新政期にあったとみたのである。^⑩この研究を通じて私はまた経世思想家魏源と経世官僚陶澍・曾国藩は同じ湖南省出身であり、経世を重視した思想家・官僚が湖南から多数輩出したことが同省が清末の政治改革更に革命の原点にもなつたと考えた。清末革命家毛沢東が同省出身であるのもこのような政治的風土が影響したとも思われる。

戦後アメリカの中国研究

阿片戦争以降の中国近代研究となると欧米の進出とその文化伝来の問題について考察する必要がある。この点戦後の研究は一時期近代における欧米の中国進出を帝國主義、植民地支配の観点から把握していたこともあってそれに抵抗する中国民衆の抵抗運動に視点があり、欧米文化受容の問題については研究の課題に余りなりえなかった。但しこの時期にあつてもアメリカの現代中国研究者である J・K・フェアバンクは、中国近代の開始と

される阿片戦争とそれに続く条約体制を「ウエスタン、インパクト」ととらえ、西洋の衝撃を受けた中国がその旧い体制から脱して近代化を促進していく過程を論じた。ここには欧米の近代を進んだ段階であると考え、伝統的な中国は遅れた段階にあるという近代化論が前提にあった。しかし中国の近代を反帝国主義、反封建主義の闘争として研究している状況下において中国近代の創出に影響を与えた欧米文化の受容の問題を論じている点で示唆を与えるものがあつた。しかしフェアバンクの研究が外因論を重視する余り中国自体の内発的要因を軽視している点が一九八〇年代からアメリカの研究者の中からも問題提起され、フェアバンク自身晩年は従来の「ウエスタン、インパクト」論を修正して内因論へと軌道修正するに至つた。すなわち西欧近代が中国に対して一時期軍事的・政治的・経済的にその支配を進めた事実を認めつつもそれでも自らの文化伝統を保持しつづけた中国の近代のあり方を研究することが肝要であるとのべた。ここには中国の文化伝統のもつ意義を評価する見解がみられる。中国近代とは中国の文化伝統を保持しながら欧米の文化を受容することにあつたのである。

私が研究を志した一九六〇年代フェアバンクの「ウエ

スタン、インパクト」論に出合い、その西洋優先の歴史観に賛同できなかったが、その叙述の中でフェアバンクが中国近代の中で欧米思想の受容の過程を論じている点に関心をもつた。特にキリスト教の伝来が中国思想に与えた影響について太平天国という反体制の思想においてもまた中国近代の変法派や革命派の思想においても考察する必要があると思つたのである。すなわち中国伝統思想と欧米思想との関係を総合的に把握することが肝要であり、これこそ思想史の課題であると考えた。

最近の研究 —— 政治と文化の問題

一九九〇年代になって私は清代経世思想について明末清初から阿片戦争期をへて清末に至る時期まで概観することができたのであるが、この考察の中で経世思想を政治思想の側面からだけ分析するのでなく中国人の思想を形成している文化概念としても把握する必要性があると思つてゐた。⁽¹²⁾この点で戦前の碩学内藤湖南の中国文化史研究は参考になった。湖南は中国文化の価値を検証するために中国史の研究を行ないそれを結実させていた。湖南によれば中国文化の伝統を保持し育成しそれを更に充

実させるのは政治の役割であると認識していた。湖南の研究から私は所謂宋代近世説の根拠となっていた君主独裁政治と地域社会の成立という論点に注目した。この地域社会を担う新興平民と士大夫層は其後清末に至るまで存続し中国の政治・経済・文化等凡ての面で重要な任務を果していたと考える。

このような湖南の見方に基づいて地域社会の構成員に共同性のあることを力説されたのが谷川道雄氏であった。⁽¹³⁾氏はその共同性の核となるものを家族共同体であると指摘し、それがあつたからこそ地域社会が存続していたと言うのである。氏はこのような地域社会が国家を構成する基層社会とみるのである。この基層社会論に対する私の課題は、中国近世における地域社会を担う構成員にみえる共同性をもたらず要因についての分析である。これについては政治的、経済的、文化的側面から考察することにある。これらの側面を研究する為には、国家が地方行政を掌握するために実施した明代の里甲制や清代の保甲制についての検討がある。里甲制は明初租税徴収をはじめ治安維持に当るなどの責任を各村落の里長や甲首に負わせるしくみを作ったことに始まるが、これは徴税方式が明中期の一条鞭法から清初雍正期の地丁銀制に移行

しても基本的に継承されていた。清初康熙末年には更に保甲制を施き各戸の相互検察による連帯責任を負わせることにした。以上の点からみると里甲制・保甲制は国家が徴税・治安面でその支配を貫徹する為にとつた政策といえるが、この機構整備には地方村落の構成員からの要請もあつたのではないかという点も考慮しなければならぬ。地方には自治組織として形成されてきたものがあり、そこには自立的要素もあるが、元末明初、明末清初という戦乱の中で地方を担う指導層が秩序の安定を求めて国家にその役割を仮託したとも考えられる。ところで明清時代鄉村の指導層を郷紳といい、鄉村の富裕戸から選任されていたが、郷紳は科擧に合格して国家の官僚にもなることがあつた。ここから郷紳は故郷にあっては地方の名望家として郷民の為につくし、国家の官僚となると国家の行政運用に携わることになった。そしてまた国家の官僚は出身地の行政官になれない、という廻避の制が宋以降実施されていたのは官僚が地方郷民とゆ着して地方の利益団体になることを防止する為であつた。ここに国家が官僚に要請する最大の業務として天下の秩序安定に寄与することにありとする治政の方針が示されていた。

ところで郷村の指導層のことを士大夫という呼称もあった。士大夫とは読書人でもあり、中国の学術書である経学・史学・詩文の学に通じていた層をさしている。この時代科挙の試験に合格するためにはこれら学術書を学習することが必須の条件となっていた。科試合格者は生員、挙人、進士へとランクが上っていったが、挙人、進士の資格を得ることによって官僚になる道が開けていた。仮に官僚になれなくともこれら資格を得ることは地方にあって最高の名誉であったわけである。これら科試合格者が地方の名望家になったのである。彼等は地方の構成員に対して責任を負うと共に天下、国家に対しても責任を負う存在であると自覚していたのである。私は郷紳・士大夫の地方及び国家に対する責任の負い方について分析する必要があると思ったのである。

そこで私はまず清末の行政官であった陶澍の治政観を研究した。⁽¹⁴⁾ 陶澍は嘉慶から道光年間にかけて活躍した行政官であったが、この時期は国内には白蓮教徒の乱、続いて国外には阿片戦争という内外の危機が進行し、行政官にかせられた職務がいよいよ重要になってきた時期である。陶澍は地方官として有能であり主に塩政・水利・漕運・農政面での改革、阿片密輸に伴なう銀貴問題に至

るまで凡ゆる江南の行政に尽力する。その一方で故郷である湖南省安化県の陶家の宗譜作成や一族や郷民に対する生活・教育扶助など郷里の発展に貢献する。ここに陶澍の国家官僚としての一面と郷紳としての一面をみるのである。

次に清末の士大夫（知識人）である王韜の思想と行動をみよう。⁽¹⁵⁾ 王韜は咸豊・同治・光緒年間に生存していたが、この時期は清朝が阿片戦争に敗北し開国することによって欧米の進出を受けた頃である。王韜は開港地上海の近郊に生れたが、この地が一時太平天国に占領されたこともあり、天国に通じたという疑いをもたれることになる。しかし上海で交游のあったイギリス人に助けられ香港に亡命し、やがてイギリスに渡航する。ここで観察したことを帰国後香港で発刊した新聞を通じて公表し、その後開明官僚にその才能が認められ上海に戻ることができ、ジャーナリストとしての余生を送ることになる。この王韜の人生の軌跡を通じて私は清末に現われた新しいタイプの中国人をみることできたのである。すなわち開国によってそれまでの伝統文化と相違した異質の欧米文化が伝来した際に、その受容のあり方の問題である。阿片戦争は欧米の秀でた軍事・産業技術に中国が敗

北したという段階から、それを生み出した欧米の政治、経済、文化の問題にまで開明的知識人の研究が及ぶことになった点である。しかし王韜にしても、中国の儒教倫理は体として尊重しており、西洋の思想は実用に留めることを明らかにしていた。この点では王韜は同時期の経世官僚、李鴻章と一致していた。

そこで清末の官僚・知識人が固守した「中体西用論」について改めて考えることにした。それについては先述したように清末曾國藩、李鴻章から張之洞に至る経世官僚の共通した思想であり、国家の基本理念であった。しかし知識人の対応となると既に小野川秀美氏の研究にあるように中体の内容について伝統的な朱子学に依拠するのでなく公羊学の原理を応用した中体論の出現もあり、更に欧米思想も加味した中体論まで現われるようになってくる。戊戌の変法で公羊学の原理を拡大解釈した康有为が政権に参画することになったことにより、単に知識人の思想ではなく国家の政策にまで発展しかねないことになった。その最たるものが「孔聖を尊んで国教となす」を請うの摺である。事ここに至って朱子学を基本理念として尊重していた張之洞の巻き返しにあい新政は失敗に終るのである。ところで「中体西用論」はその後清

朝の滅亡によってどのようなものになったのであろうか。確かに王朝支配体制の教学であった「中体」論は消滅したといえる。しかし地方構成員に共有されていた儒教倫理については中国が共和国になった以降も中国人の思想として存続していただろう。私の今後の研究の一つはこの点の解明にある。

現代の中国史研究の課題

はじめにでのべたように何故中国近代史研究を志したかといえば、現代の中国を理解する鍵となるものをそこに見い出そうとすることにあつたからである。ところが戦後の中国史研究はその時々中国状況の変化に対応して様々な様相を呈してきた。すなわち戦後中華人民共和国の成立から承認に至る二十数年間は革命史が主流であり、承認以後中国が開放政策をとり市場経済を導入して以後の二十数年間はその源流として近代になって中国が国際社会の中で資本主義経済を育成してきた過程に関心が移ってきた。このことにもなって研究上最も大きな変化をもたらしたものは洋務運動の評価であった。洋務運動については当初清朝が列強に政治的経済的にも隷属

化していく過程としてとらえ、それを推進した曾國藩、李鴻章等の漢人官僚は列強に中国の權益を売った張本人として位置づけていた。その上これら漢人官僚は中国革命の源流ともいえる太平天国運動を鎮圧した反革命分子でもあったというのが大方の評価であった。ところが中国が開放経済を導入して以後は洋務運動は今日の開放経済の先駆的なものとなり、この運動を推進した漢人官僚は開明派として中国の近代化に貢献した人物として評価されるようになった。更にこれら漢人官僚が太平天国を鎮圧したことに対しては、中国の秩序を回復することに貢献したとして評価する。ここには人民共和国成立以後の歴史観と比較して一八〇度の転換がみられるのである。ところで私は当初阿片戦争の研究を始めた時に、この戦争はイギリスの中国侵略の第一歩であり、それを断固阻止しようとした林則徐の姿勢を高く評価していた。¹⁰⁾『中国近代史』の著者范文瀾も林則徐を抵抗派と称していた。その後林則徐を研究する中で、外国の進んだ軍事・産業技術、それに政治・経済制度、更に国際法まで学習しようとしていることを知り、林則徐は開明派であると考えた。そして更に林則徐は国内の吏治・理財にも関心を有し、内政改革を実施していた面も知り、ここか

ら経世派と称するようになった。その上林則徐が内政改革実施の際盟友であったのが陶澍であることを知り、これら経世官僚の一派が清末の内政、外交面でも重要な役割を果たすことを立証した。そして陶澍・林則徐を継承する経世官僚が曾國藩・李鴻章でありこれが清末の張之洞に至っている点を検証した。ところで最近内藤湖南の研究をしているが、湖南は既に曾國藩・李鴻章について清末の行政に貢献していることを叙述していた点に気がついた。¹¹⁾湖南は特にこれら官僚が太平天国を鎮圧した際に結成した湘勇・淮勇が地域社会の再生に役立ったものとして其後も受けつがれていった面を明らかにしたこと、また清末張之洞に至る漢人官僚が中国の伝統を生かしながら欧米の制度も取り入れて改革を推進してきたこと等の叙述である。ここにはこれら漢人官僚が洋務面のみならず内政面でも尽力した点を留意しているが、これは私の考える経世官僚という用語が妥当であることを立証したものと考えたい。それを湖南が湘勇・淮勇の形成について宋代以降の地域社会の中で生み出されたものであること、更に伝統を重んずる中国で欧米の制度や思想を単に模倣するだけでは中国の実情にあった改革にならないと考えている点については今後の研究課題でもあろう。

中国の現代の研究は、洋務運動の評価についても開放経済実施以降の中国政府の政策方針と軌を一にしている。

また太平天国運動について評価が変わったのも中国が国内秩序の安定を第一義と考えていることによっている。

最近の中国の研究は、今時の地域社会、基層社会の成立を歴史的に考察するところにも及んでいる。中国において、内藤湖南研究が盛んになってきたのも以上の理由からであろう。¹⁸⁾

ところで内藤湖南がめざしたものは中国文化事象の検証であった。湖南は中国文化史の跡を辿ることによって、清朝の学術・芸術が到達した段階を高く評価していたが、将来はそれが庶民にまで普及することを念願していた。

すなわち文化が決して一部の知識人の独占物でなくすべての民に共有できるものであらねばならないということである。その一方で湖南は物質文明の進展により環境が破壊されることに對しても危惧の念をいだいていた。文化は人々に幸せをもたらすものでなければならぬというこの命題は今こそ人類に与えられた最大の課題である。過去日本は中国から漢字・津令・儒教・仏教を学びそれを日本の固有の文化と適合させてすぐれた文化を育成してきた。近代になって欧米文化をいちはやく受容するこ

とによって更に日本文化はより豊かなものとなった。中国にあっては伝統文化が根強いものであったので欧米文化の受容は遅れた。しかしこの遅れた原因についてそこに物質文明の受容の尺度のみで示すことでは答えにならないであろう。それよりも伝統文化の内実について検証しその現代的意義を明らかにしなければならぬ。例へば中国が永年培ってきた儒教倫理は今日全く意味のないものになったのであろうか。また地域社会を構成してきた家族共同性についても同様なことがいえる。

おわりに

この小論は私が七十才を迎へ大学を退職することになったのを期に現在考えていることを要約して述べたものである。戦後五十五年以上の月日がたち日本と中国の關係も大きく変わった。中国は今では開放経済・市場経済を一層促進し、資本主義経済諸国とほとんど変わらない程になってきている。日中国交回復以後日本と中国は政治的経済的文化的にもより親密になった。しかしその一方で十数年前発生した天安門事件をみると中国で人権は保障されているのかという疑問ももった。ただその際中

国が公表した農民も含めた凡ての人民の人権を保障することが優先するという点も考えてみる必要がある。日本にとって中国は益々身近かな国になったが、まだわからないことも多々あるのも事実である。こんなことから考えても中国の歴史を研究する意義は十分あると思っている。昨今の風潮として歴史離れが進んでいてそれが研究者の分野にまで及んでいるが、このような事態になったのも歴史学を専攻する研究者にも一端的責任はあろう。私は今後可能な限り歴史研究を続けていき、それが多くの国民にも共有できるものになりたいと思っている。

注

(1) 『宮崎市定全集2』所収(一九九二、三、岩波書店)

初出は『東洋の近世』(教育タイムス社、一九五〇、一一)全集自跋の中でのべる宋代君主独裁制と官僚制同時に知識階級、これを地盤とした新文化、宋学、自話文学の発生。此等を総合してルネサンス文化と見ることが出来、西洋のそれに比して数世紀先行することとなるという指摘は、中国は西洋より遅れたというイメージをもっていた筆者にとって感動的なものであった。

(2) 小野川秀美氏の論稿は『清末政治思想研究』(東洋史研究叢刊八、一九六〇、のち、みすず書房、一九六九

として公刊された)。

(3)

島田虔次『近代思维の挫折』(一九七〇、十二、筑摩書房)初出は、同名(一九四九、三)本著あとがきに「近代」という語について説明しておられる。その中で宋以後の中国にもルネサンス期以後のヨーロッパと同様な現象があるにちがいない、そのことの追究によって中国史の普遍性と特殊性とが明白になるに相違ない云々とのべ、要するに、わたくしの理解するかぎりでの西欧モデルで中国をつかまえてみようとしたのであった。ただ本書を通じて、近代という語のほとんどすべてを「近世」でおきかえるべきであったこととをべている。ただ旧著の序で「内藤湖南博士に従えば、中国の近代(宋・元・明・清)は平民の発展と政治の重要性減衰という二つの根本的特徴を以て成立しているものである。思想學術の分野においては、それは、自由研究、自由批判のかたちで現われる。本書においてわれわれの展開したところの研究は、畢竟博士のこの示唆より生まれたものに他ならぬ」とのべている。

(4)

溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』(東京大学出版会、一九八〇)本書に関しては、拙著『清代政治思想史研究』所収 第三章「清末政治思想と経世学」、第二章「清代経世思想と実利思想」にその視点を紹介すると共に筆者は明末清初の王学左派から朱子学への連続という大前提のもとに史学研究も進める必要があることを付記した。

(5)

拙著前述の書 第三部、終章「清代思想史研究の現状

と展望」参照

(6) 拙著『清代政治思想史研究』（汲古書院、一九九一、二）

(7)

溝口雄三『方法としての中国』（東京大学出版会、一九八九、六）所収「近代中国像は歪んでいないか——洋務と民権および中体西用と儒教」参照

(8)

拙著前述の書 第三部、第一章「湖南官僚形成過程と経世思想」参照

(9)

拙著前述の書 第三部、「清末政治思想と経世学」序章「洋務運動と経世思想」他参照

(10)

拙著『清代政治思想と阿片戦争』所収（同朋舎出版、一九九五、二）第一章 第四節、「清末経世思想の二大潮流」参照

(11)

拙著『清代の政治と文化』所収（朋友書店、二〇〇二、三）第四部 第一章「現代欧米の清代研究動向」この論稿ではフェアバンク他戦後アメリカ及びイギリスの中国研究状況について概括している。尚フェアバンク著『中国の歴史——古代から現代まで——』共訳（ミネルヴァ書房、一九九六）は晩年の研究の集大成である。

る。

(12) (11) の拙著 序論参照

(13)

谷川道雄「中国社会の共同性について」『東洋史苑』第五八号（二〇〇一、十）参照

(14)

谷川道雄「中国前近代社会の基本構造試論」『名古屋大学東洋史研究報告』第二六号（二〇〇二、三）参照

(15)

(11) の拙著 第二部 第一章「陶澍の行政と思想」参照

(16)

(11) の拙著 第二部 第二章「文人王韜に関する一考察」参照

(17)

范文瀾『中国近代史 上冊』第一章「第一次鴉片戦争」（人民出版社、一九四七）

(18)

尚林則徐研究については拙著(10)の書 第二章第二節「林則徐研究における現状と課題」参照

(19)

拙著(11)の書 第三部 第二章「湖南の中国文化論と政治論」参照

(20)

拙著(11)の書 第三部 第一章「内藤史学における中国文化的アイデンティティ」参照